# 第四講 演習問題 一・二・三

**一** 次の文章を読んで、問いに答えよ。（設問の都合で送り仮名・返り点を省いたところがある。）

魏ノ文侯問ヒテ二李克ニ一曰(い)ハク、「呉之a所‐二以亡(ほろ)ブル一者ハ、b何也。」李克c対曰ハク、「数(しばしば)戦ヒテ数勝テバナリト。」文侯曰ハク、「A数戦ヒテ数勝ツハ、国之福也。其ノ所‐二以ナルハ亡ブル一、何也。」李克曰ハク、「数戦ヘバ則チ民疲レ、数勝テバ則チ主驕(おご)ル。以テ二驕主ヲ一治ムルハ二疲民ヲ一、此レ其ノd所‐二以亡ブル一也。」是ノ故ニ好ミレ戦ヒヲ窮(くる)シムルモノハレ兵ヲ、B未レ有二不レ亡者一也。

（『新序』による）

（注）
魏――中国古代の国名。
文侯――魏の君主。
李克――文侯の臣下。
呉――中国古代の国名。

**問一**　傍線部ａ「所以」・ｂ「何也」・ｃ「対」・ｄ「也」の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。現代仮名遣いを用いてもよい。

ａ＝　　　　　ｂ＝

ｃ＝　　　　　ｄ＝

**問二**　傍線部Ａ「数戦ヒテ数勝ツハ、国之福也。其ノ所二以ナルハ亡ブル一、何也」をわかりやすく口語訳せよ。

**問三**　傍線部Ｂ「未レ有二不レ亡者一也」をすべて平仮名で書き下し文にせよ。現代仮名遣いを用いてもよい。

**問四**　春秋時代に呉と激戦を繰り返し、呉を滅ぼした国はどこか。その国名を漢字一字で答えよ。

**二**　次の文章は、司馬遷の『史記』を評論したものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

太史公叙帝王、則曰本紀。公侯伝国、則曰世家。公卿特起、則曰列伝。此其例也。其列孔子為世家、(1)奚其進退無所拠耶。孔子旅人也。棲棲衰季之世、無尺土之柄。此列之以伝、(X)宜矣。(a)曷為世家哉。(Y)豈以仲尼躬将聖之資、其教化之盛、舄奕万世、故為之世家以抗之。又非極摯之論也。夫仲尼之才、帝王可也。(b)何特公侯哉。仲尼之道、世天下可也。(Z)何特世其家哉。処之世家、仲尼之道、不従而［A］。置之列伝、仲尼之道、不従而［B］。而遷也自乱(c)其例。所謂多所抵牾者也。

（『臨川先生文集』）

（注）○太史公―漢代の歴史家、司馬遷。後にある「遷」も同じ。　○公侯伝国―諸侯で領地を世襲する者。
○公卿特起―士大夫などで特別な人生を送った者。　○棲棲衰季之世―道義の衰えた時代にあわただしく働きかける。
○尺土之柄―少しばかりの領地。　○仲尼―孔子の字（あざな）。　○躬将聖之資―聖人に近い資質を自分で磨く。
○舄奕万世―永遠に輝く。　○極摯之論―最適な議論。　○世天下―天下を受け継ぐ。　○抵牾―くいちがう。

**問一**　波線部(X)～(Z)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(X)　宜　ア　まさにすべし　イ　よろしくすべし　ウ　むべなり　エ　のぶるなり　オ　いかんせん

(Y)　豈　ア　なほ　イ　けだし　ウ　およそ　エ　もし　オ　あに

(Z)　何特　ア　なんぞただに　イ　なんのとくぞ　ウ　なにをもつて　エ　いづれのひとり　オ　いづくのことに

**問二** 二重傍線部(1)の解釈として最もふさわしいものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。

ア どうすれば、孔子の生き方を模範として、歩んで行けるだろうか
イ どうして、司馬遷が孔子の人生を、高く評価したのだろうか
ウ 何と、孔子の伝記の配置には、根拠がないものか
エ 何としても、孔子の伝記を、列伝に置きたいのだろう
オ どうしたら、孔子のような判断力を確立できるのだろうか

**問三** 傍線部(a)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次のア〜オの中から一つ選びなさい。

ア なんぞ なすに せいかをや
イ なんぞ せいかと なさんや
ウ いづれの ために せいかなるかな
エ いづれか せいかを なさんとす
オ なにか せいかの ためにせん

**問四**　空欄[A]・[B]に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　A 難・B 易
イ　A 動・B 静
ウ　A 内・B 外
エ　A 日・B 月
オ　A 大・B 小

**問五**　傍線部(b)の解釈として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　どうしてただ諸侯に過ぎないだけなのだろうか
イ　どうすれば特例として諸侯になれるだろうか
ウ　どうか特別に諸侯にしてほしい
エ　どうしても特異な諸侯となってしまう
オ　どういうわけで一人だけ諸侯なのか

**問六** 傍線部(c)の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 「其例」とは、比喩のことで、孔子を永遠の旅人になぞらえている。
イ 「其例」とは、基準のことで、本紀・世家・列伝の収録の目安である。
ウ 「其例」とは、実例のことで、実際に孔子が生きた時代の事件である。
エ 「其例」とは、法令のことで、筆者の時代と司馬遷の時代の違いである。
オ 「其例」とは、類似のことで、司馬遷と孔子の考え方が近いことである。

**問七** 本文の内容に合致するものを、次のア～キの中から二つ選びなさい。

ア 孔子は天下を取りたかったが、結局はむなしく多くの諸侯に遊説しただけで、亡くなってしまった。
イ 孔子は単なる旅人に過ぎず、その伝記を本紀に収録したのは、万人の敬意の表れであった。
ウ 孔子は諸侯であったのに、それが天下には知られていなかったので、司馬遷が訂正した。
エ 筆者は、孔子の道の偉大さから考えれば、その伝記を司馬遷が世家に収録したのは、不当であったと考えている。
オ 筆者は、司馬遷が執筆の原則を自ら混乱させたことを、非難している。
カ 筆者は、孔子の伝記を収録するなら、本紀にすべきであったと考えている。
キ 筆者は、孔子も司馬遷も同じ伝記の中に収録すべきだと考えている。

**三**　次の文章は、唐代の柳宗元が、「蝜蝂（ふはん）」という虫と対比しながら、ある種の人々について、自分の意見を述べたものである。よく読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、返り点・送り仮名を省略したところがある。）

蝜蝂者、善負小虫也。行遇物、輒持取、卬其首負之。背愈重、雖困劇不止也。其背甚渋、物積因不散、①卒躓仆②不能起。人或憐之、為去其負。A苟能行、又持取如故。又好上高、極其力③不已、至墜地死。

今世之嗜取者、遇貨不避、以厚其室、不知為己累也、B唯恐其不積。及其怠而躓也、黜棄之、遷徙之、亦以病矣。苟能起、又不艾。日思高其位、大其禄、而貪取滋甚、以近於危墜、観前之死亡、不知戒。雖其形魁然大者也、其名人也、而智則小虫也。亦足哀夫④。

（『柳宗元集』による）

注 渋……なめらかでなく、物がすべり落ちにくいさま。
貨……財貨。　室……家の財産。　累……わざわい。
怠……注意をおこたる。　黜棄……捨てさる。　遷徙……移す。
病……くよくよ悩む。　危墜……危険。
前之死亡……以前に、高い位や財貨を貪ったがために死ぬに至った人。
魁然……大きいさま。

**問一** 傍線部①〜④の文中における読み方をすべて平仮名で記しなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

①＝　②＝　③＝　④＝

**問二** 傍線部Aを口語訳しなさい。

**問三** 傍線部Bを書き下し文に改めなさい。ただしすべて平仮名で記しなさい。

**問四**　二重傍線部「又」は、「［ア］ということに加えて、また［イ］ということもある」、という関係を示している。この場合のア、イの内容についてそれぞれ簡潔に説明しなさい。

ア＝

イ＝

**問五**　作者は、人間はどうあるのが望ましいと考えているのだろうか。簡潔に述べなさい。

## 【第四講】

### 〔模範解答〕

**一**

**問一**　a　ゆゑ〔え〕んの　b　なんぞや　c　こたへ〔え〕て　d　なり
**問二**　何度も戦って、何度も勝つのは、国にとって幸いなことである。それなのに呉が滅びた理由は、どうしてか。
**問三**　いまだほろびざるものあらざるなり　**問四**　越

**二**

**問一**　(X)　ウ　(Y)　オ　(Z)　ア
**問二**　ウ　**問三**　イ　**問四**　オ
**問五**　ア　**問六**　イ　**問七**　エ・オ

**三**

**問一**　①　つひ〔い〕に　②　あたは〔わ〕ず　③　やまず〔やめず〕　④　かな
**問二**　もし（蝜蝂は）前に進めるようになったならば、ふたたび前のように物を背負う。
**問三**　ただそのつまざるをおそるるのみ。
**問四**　ア　物を何でも背負うのが上手である
イ　高いところに登るのが好きである
**問五**　身の丈以上の高位や財貨をむさぼらないのが望ましいと考えている。

## 〔現代語訳〕

**一**

魏の君主の文侯が臣下の李克に質問して言うことには、「呉の国が滅びたのは、どうしてか」と。李克がお答えして言うことには、「何度も戦って、何度も勝ったからです」と。文侯が言うには、「何度も戦って、何度も勝つのは、国にとって幸いなことである。それなのに呉が滅びた理由は、どうしてか」と。李克が言うには、「何度も戦えば、民は疲れるし、何度も勝てば君主は思い上がる。思い上がった君主がつかれた民を治めたのが、これが滅びた理由です」と。こういうわけで戦を好んで武力を尽くした国は、いまだ滅びないものはないのである〔＝必ず滅びた〕。

**二**

司馬遷は帝王のことを述べると、本紀という。諸侯で領地を世襲する者を、世家という。士大夫などで特別な人生を送った者を、列伝という。これはその（『史記』の）基準である。司馬遷が孔子について世家とするのは、何と、孔子の伝記の配置には、根拠がないものか。孔子は旅人〔＝諸国を遊説した人物〕である。道義の衰えた時代にあわただしく働きかけ、少しばかりの領地もない。孔子を列伝に入れるのが当然である。どうして世家としたのか、いや、おかしい。仲尼〔＝孔子〕が聖人に近い資質を自分で磨いて、その教えが盛んで、永遠に輝き、だから孔子を世家としてそして孔子を持ち上げたのか。また（これも）最適な議論ではない。そもそも孔子の才能は、帝王並みだと考えられる。どうしてただ諸侯に過ぎないだけなのだろうか。孔子の教える道は、天下を受け継ぐ帝王の教え並みだと考えられる。どうしてただ領地を世襲する諸侯の教えに過ぎないだけなのだろうか。孔子を世家に入れても、孔子の教える道は、（そうすることに）よって大きくならない。列伝に入れても、孔子の教える道は、（そうすることに）よって小さくならない。だが司馬遷は自分でその基準〔＝本紀・世家・列伝の収録の目安〕を乱している。いわゆるくいちがう所が多い（と言われている）ものである。

三

蝜蝂は、物を背負うのが上手な小さな虫である。前に進んで物に出会うと、いつも持って取って、頭をあげてこれを背負う。背中はどんどん重く、苦しいことが激しくなってもやめないのである。その（虫の）背中はとても物がすべり落ちにくく、物を摘んでも散らばって落ちることがないことにより、とうとうつまずいて倒れて立つことができない。人がこれをかわいそうに思い、虫のために背負っているものを取り除く。もし（蝜蝂は）前に進めるようになったならば、ふたたび前のように物を背負う。また高い所に登るのが好きで、その力も限界までやり尽くして止まらず、地に落ちて死んでしまう。

今の世の中で物を取ること好きな者は、財産にあっても避けず、その家の財産を増やし、自分のわざわいとなることもわからずに、ただ（財産が）増えないのではと恐れているだけだ。そういう者が注意をおこたりつまずいてから、これ〔＝財産〕を捨てさり、これ〔＝財産〕を移して、またくよくよ悩む。もし起きることができれば、また（財産を増やすことを）やめない。日々、自分の位を高くして、俸禄を増やすことを考えて、むさぼり取ることがますます大きく、危険に近づいて、以前に、高い位や財貨を貪ったがために死ぬに至った人を見たことがあるのに、戒めとすることを知らない。その形は大きく（小さな虫に比べたら）巨大な者で、その名は人間というが、その見識は小さい虫である。悲しむのに十分であろうなあ。